牢獄、コロナ、白米

文学部仏文科 2 年 佐藤勇人

ある日の午後のこと、フランス文学概論の授業の教科書である「フランス文学の楽しみ方」（永井敦子、畠山達、黒岩卓編著、ミネルヴァ書房）を読むとはなしに読んでいると突然「牢獄」という表題が飛び込んできた。

「牢獄」という表題から始まるこの章では文学と牢獄との関係が論じられており、それによると例えばサド侯爵やジャン・ジュネといった多くの文学者が獄中生活のなかで旺盛な創作力を示したという。この章の冒頭では我が国の大正時代の無政府主義者、大杉栄の手記の一節が引用されており、そこには出獄後に始めて白米のおいしさを実感したという大杉の感慨がつづられている。この文章を読んでいてまず私が感じたのはある種の親しみであった。大杉のこの特異な体験が決して他人事とは思われなかったのだ。

それはつい先ごろまで私がある種の「獄中生活」を送っていたからだろう。なにも何か罪を犯したというわけではない。去年一年間の授業はすべてオンライン形式で行われたため、一年を通してキャンパスに足を運ぶことは稀であった。そうした状況はごく最近まで続いていた。さらに、オンライン主体で授業が進められたということにもよるのだろう、雨あられと降り注ぐ課題と格闘せねばならず、一日中部屋の中、というよりもコンピューターの画面の中に籠る日々が続いた。一年次の私の生活空間は、映画の「マトリックス」さながらに、もっぱら画面に限られていた、といっても過言ではないかもしれない。これはある種の監禁状態ではないだろうか。しかしつい最近になって一部対面の授業が再開され、また初夏の爽やかな空気に誘われて、外の世界に足を運ぶ機会が増えた。ある日「出獄」した私を感動させたものは白光する白米ではなかったが、大杉同様、私もまた普段見落としがちな、それでいて大切な存在に気付かされたように思う。

扉の外へ一歩踏み出すと、初夏の強い日差しが薄暗がりに慣れた私の目をくらませた。しばらくして目が慣れてくると、まるで霧が晴れた後のように、一幅の絵のような光景が姿を

現した。紺碧の空を背景に白い雲がゆったりと流れる。軒端にかかる蜘蛛の糸に貫かれた雨露が日の光を受けて輝く。ツツジの花弁の紅の鮮烈さは目をみはるばかりだ。鳥が鳴き、同級生たちがとりとめもない会話に興じながら通り過ぎていく。そして、静寂が訪れる。よくよく身の回りを見渡してみれば、楽園はすぐ手の届くところに広がっているではないか。

危機は多くの真理を我々に開示して見せるという。先年から猛威を振るっていまだ収まる気配を見せないこのコロナ危機もまた多くの現実を我々に突き付けたが、その多くはそこから思わず目をそむけたくなるような類のものばかりであった。しかしコロナ禍は次の事実をも白日の下にさらしたのだ。それは我々が生きているこの世界、そして我々の日々の生活が美しいものに満ちているという事実である。